玉匣から玉手箱へ　―浦島伝承史考―

武笠俊一

【要旨】
「浦島太郎」という説話は、古代の丹後国風土記にその原型が見え、長い時間をかけて昔話へと成長したものである。この物語は長く仏教的な報恩譚と見なされてきたが、むしろ婚姻破局譚のひとつと考えるべきである。
この昔話には謎が多い。始めは玉匣のち玉手箱と呼ばれた神女からの贈り物は、何を意味していたのか、白煙を浴びた浦島はなぜ老人となったのか。こうした謎の多くは、「浦島太郎」を破局譚として読むことによって解明することができる。

一　はじめに

今日浦島太郎の物語として知られているロマンスは、長い伝承と変容の歴史をもつ説話である。この物語は、古代の記録『丹後国風土記逸文』から『御伽草子』をへて、近世の多様な昔話群へと成長した。そして、近代に入ると国定教科書の教材と文部省唱歌となって、広く日本人に受け入れられた。浦島の物語は、桃太郎、かぐや姫と共に三大童話の一つとして、日本人の言語文化の基底となっている。

浦島の物語はその長い伝承の歴史の中で大きく変貌した。それは、桃太郎とかぐや姫が、物語の基本をほとんど変えることがなかったことと著しい対照をなしている。その物語の構造は、ほぼ同一（ハンサムな若者が海の彼方の神仙の地に行き、彼の地で神女と至福の時を過ごした後帰郷したという）であるが、史書に残る古代の伝承と近代にいたって広く流布した物語とでは、その細部も結末も大きく異なる。このような「物語の成長」は何を意味していたのか。本稿では、浦島伝説の原型がどのように成長して現在の「昔話」となったかを明らかにする作業をとおして、この昔話に秘められた謎の解明と、この物語に反映された庶民の生活意識を明らかにしたい。

二　「昔話」としての浦島物語

現代において、浦島説話はもっとも代表的な昔話のひとつと考えられている。しかし、この説話が「昔話」であるかという点については、多くの意見がある。たとえば、民俗学の泰斗柳田国男が、これを昔話と認めなかったことはよく知られている。彼は『海上の道』の「海神宮考」で次のように述べている。

日本では浦島太郎というのが、この種仙郷説話の通り名のようになっているが、これはある一地に保存せられていた歌物語で、筋も単純に過ぎ結果も淋しく、時の経過の速さという一点を除けば、昔話としての俱通性〔傍点引用者〕をもっていない。国内各地の幾つかの類例［昔話の］には同じ名をもって呼ばれているものがあるが、話の構成

はかなりちがっている。あるいは「竜宮入り」という総称を用いてはどうかと思ったこともあった。（『定本柳田国男集第一巻、四八頁）

柳田国男が歌物語と言うのは『丹後国風土記』逸文の「浦の嶋子」であろうか、それとも『万葉集』巻九に収められている高橋虫麻呂の長歌だったろうか。いずれにせよ、柳田は、こうした古代の物語と竜宮にまつわる昔話とを明確に区分し、前者を昔話とは見なさなかったのである。さらに、柳田国男は「竜宮」という言葉は新しいもので、古くはニルヤと呼ばれ、それは「海の隠れ里」だったという。そしてこうした海のかなたの国との交流を描いた昔話（竜宮女房、竜宮童子など）を一括して「竜宮入り」と呼ぼうとした。そして、自分の関心をこれに集中し、「浦の嶋子」の歌物語にもその後継である説話（御伽草子のそれなど）にも、ほとんど興味を示さなかった。

この点について、柳田国男より後の昔話研究者の多くは曖昧な姿勢をとってきた。一口で言えば、柳田国男の警告にもかかわらず、浦島説話を昔話に含めることが多かったのである。民俗学者のこうした姿勢を真っ正面から批判したのが三浦佑之である。彼は、今日昔話とみなされている「浦島太郎」は明治期に作られたものだという。つまり、文学者巌谷小波が明治二〇年代に御伽草子の「浦島太郎」を元に近世の物語や報恩譚を念頭において児童向けの作品に仕立てあげたものであり、「共同体の伝承として語り継がれたものではない」（三浦、一九八九年、二〇八頁）と言う。小波のこの作品がほとんどそのまま国定教科書と文部省唱歌に受け継がれ、やがて「昔話」と信じられるようになった。しかし、それは誤解だと言う。

現在の昔話研究においては、「浦島太郎」は昔話の一話型として分類され、口承の昔話として承認されている。たとえば、……『日本昔話大成』では、本格説話の異郷譚のなかに、……収められている。［それらは］国定教科書と同じ内容か、……呪宝譚と結びついた話かのどちらかである。その前者は、間違いなく明治以降に教科書の影響によって語り出されたものであり、後者の話は、そこから生じたパロディー風のものであって、近世以前から純粋なかたちで口頭によって語り継がれていたと認められる話は一つも存在しないのである。

（三浦、一九八九年、二〇八—九頁）

三浦の指摘の正しさは、日本各地で集められた「昔話採集資料集」の類を見れば明白である。そこには「猿婿入」「蛇婿入」などの昔話は頻出するが、「浦島太郎」の物語はほとんどない。三浦は明治期の国定教科書に由来する新しい昔話としての「浦島太郎」を認めているが、それすら採取資料の中にはほとんど見られないのである。

三浦の主張するように、浦島太郎が口承文芸の一つとしての昔話でなかったということは歴史的事実として認めてよいだろう。しかし、現在では浦島太郎はもっとも代表的な昔話として広く日本人に受け入れられている。それは、現代の昔話が、口承によって伝えられるものではなく、文字や映像の形で受け継がれるものになったからである。このことを前提にするなら、新しい昔話としての浦島太郎を否定することはできにくい。

柳田国男は「浦島太郎」を歌物語の一つと考えて昔話と見なさなかった。この事を彼は『口承文芸史考』の中で伝説と昔話の違いとして次のように説明している。

詳しく説明すれば切りはないが、眼目はたった三つ、（イ）一方はこれを信じる者があり、他方には一人もないこと、（ロ）片方は必ず一つの村里に定着しているのに対して、こちらはいかなる場合にも「昔々ある処に」であること、（ハ）次には昔話には型があり文句があって、それを変えると間違い〔傍点引用者〕であるに反して、伝説にはきまった様式がなく、告げたい人の都合で長くも短かくもなし得るということ

（定本柳田国男集第一巻四八頁）

この定義に従うならば、巌谷小波と国定教科書をへて日本人の間に広く流布した「浦島太郎」は昔話としての要件（柳田のいう「具通性」）を備えてるとみるべきである。戦前は国定教科書によって浦島太郎の物語は国民に共有され、その権威によって容易な改変は許されなかった。しかし、現代ではもはやそのような制約はないにもかかわらず、巌谷小波によって確立されたこの物語の構造を改変しようとするものはほとんどいない。もし、誰かがこの物語の「白煙老化結末」を変えようとしても、それは日本人の受け入れるものとはならないであろう。つまり、柳田のいう一つの「型」が確立され、それを変えることは「間違い」と見なされるようなったのである。

たとえ一人の文学者による創作であるとしても、現在の浦島太郎は昔話としてひろく日本人に受け入れられている。なぜこのようなことが起きたのか。私は浦島太郎の物語が、昔話のもっとも正統なプロセスに沿って成長し、完成されたからだと考えたい。

三　婚姻破局譚としての浦島説話

昔話の浦島は、浜で子どもにいじめられていた亀の助命と放生によって物語が始まる。しかし、亀の命を助けるという善行をした者がなぜ家族も故郷も失い、しかも老化という悲劇に見舞われなければならないのか、その理由をこの昔話は一言も語ってはいない。

浦島説話の原典である『丹後国風土記』には、報恩説話の要素はまったく備わっていなかった。しかし中世に広く流布した『御伽草子』の浦島物語は、浦島明神の縁起説話であると同時に仏教的な報恩説話のスタイルをとっている。白煙をあびて老人となった浦島は長寿の末に鶴に変じ明神として祭られた。草子の語り手はこれが報恩の物語であることを強調しているが、亀の助命という善行に対する報恩自体は成就してはいない。この説話を詳細に読むと、語り手自身が主人公の運命に報恩の成り立ち難いことを感じ、説明に苦しんでいるようにすら思える。近代に生まれた昔話としての「浦島太郎」は、報恩譚としての語り口とスタイルをとってはいるが、すべての人が知るごとく、これは主人公の白煙老化によって終わる。つまり、浦島説話はすべて「アンチ報恩譚」なのである。

世界各地には、異類婚姻譚ないしは神婚譚に分類される説話は極めて多い。若者だけでなく子どもたちにとっても男女間のロマンスは大きな関心事だったからだろうが、こうした物語はいずれの国でも、説話世界では人間とそれ以外の者（神霊や動物たち）との交流として語られた。この点では日本も例外ではない。日本のこの種の説話も原初をたどれば国外から伝播した可能性をもつものが少なくはない。しかし、その起源の問題を別にすると、日本における異類婚姻譚は他国とは異なる一つの

特徴をもっている。それはロマンスが必ず破局で終わるという点である。つまり、日本人は「白雪姫」や「眠れる森の美女」とは異質な説話世界を育んできたのである。

蓬莱山の美女と筒川の嶋子は、海の彼方の楽園で二人だけの永遠の愛を慈しむことができたはずである。御伽草子でも昔話においても、浦島太郎は乙姫との生活を捨てる強い必然性があったとは思えない。にも関わらず、二人の婚姻は破局にいたる。浦島説話はまぎれもなく日本の婚姻破局譚の大きな流れの中に位置づけられるべきものだったのである。

しかし、浦島説話の破局は、他の破局譚と比較してみると極めて不可思議なものである。他の異類婚姻譚、例えば「蛇婿入り」や「鶴女房」もすべて破局にいたるが、聞き手にとってその理由は納得できるものである。しかし、浦島物語の破局は不理尽で、しかも唐突である。玉手箱についての「開けるな」という禁忌の侵犯が直接の原因だとしても、中には何もなかったのであるから婚姻破綻の根本原因をこれに求めることはできにくい。結局、浦島の物語とは、婚姻破局譚でありながらその原因が謎としてしか示されていない説話だったという事になる。

四　浦島説話の成長

浦島説話群として知られるものは、極めて数多く、また多種多様でもある。島子の婚姻譚そのものだけでなく、その後日談や子孫の竜宮再訪、あるいはそのパロディといった類のものにまで及ぶ。本稿では筒川の浦の島子の物語と基本的構造を等しくする破局婚姻譚だけに考察を限定するが、この種のものの代表的なものは、次の五種である。

①丹後国風土記逸文
②万葉集
③御伽草子
④巌谷小波の創作
⑤国定教科書と文部省唱歌

この五種の浦島説話のうち、⑤はすでに述べたように、④をそのまま教材としたものである。もし我々が浦島物語の成長の過程を探ろうとするなら、巌谷小波の作品とそれにいたる説話群を対象とすれば一応の分析は可能だと思われる。

そこで、①から④にいたる四種の浦島物語を当面の対象とし、「玉匣」ないしは「玉手箱」と呼ばれている神女から若者に送られた神秘的な箱とその中身について考察し、その開封の意味を問いたい。

①丹波国風土記逸文

神女亀姫が筒川の島子に与えた玉匣の中に入っていたものは何だったのだろうか。風土記逸文はこの事について後の物語のようなあいまいな説明をしていた訳ではない。嶋子が箱を開けた瞬間を、逸文は次のように描写している。

たちまちの間に芳しき蘭のごとき体、風雲にしたがひて、蒼天に翩飛き。嶋子、すなわち、期要にそむきて、還りてもまた会い難きことを知り、首を廻らして佇み、涙に咽びて徘徊りき。

（新編日本古典文学全集五、一九九七年）

玉匣の中に入っていたものを、逸文の原文は「芳蘭之体」と記している。これを「芳しき蘭のごとき体」と読むか、「芳蘭のごとき体」とす

るか、前者なら「蘭のように美しい花」であるし、後者なら「花のように美しい何物か」ということになる。それが何を意味するか明言されている訳ではないが、本文を虚心に読めば、それは「亀姫の化身」と考えるべきであろう。何故なら、逸文は芳蘭之体が「風雲」とともに飛び去ったと記しているからだ。思い出すべきことは、亀姫と嶋子の最初の出会いの場面である。海上で釣りをしていた時、突然出現した神女をみて驚く嶋子に対し、女は「風流之士、独り蒼海に汎べり。近しく談らはむとするこころにたえず、風雲のむた来つる」と答えた。つまり、神女は風雲と共に現れたのである。ならば、風雲と共に去ったものは、神女の化身以外には考えられない。

筒川の浦の嶋子は「姿容秀美しく、風流なること類なかりき」と語られた男であった。ハンサムで女が放っておかないプレーボーイだったと言うのだ。その男がたった一人でいる時を見計らって亀姫は現れた。この伝奇譚によって、筒川の日下部の人々は彼らの始祖が神女をすら魅了する好男子だったと自慢していることになる。当然ながら、蓬莱山の神女は花となって玉匣の中に潜み、嶋子と常に共にいようとしたのである。

箱の中に潜んでいたものが亀姫の化身であるなら、玉匣は神女の隠れ家であり、神仙の人を俗界から保護するシェルターであると考えられる。それを開ければ亀姫はこの人の世には留まれないのは明らかであるから、「開けるな」という禁止は極めて当然なものであったことになる。

ただの人である嶋子が、こうした玉匣の意味を知るはずもなかったろうが、それでも彼は風雲とともに飛び去ったものを見て、それが亀姫の化身であり、二度と再会し得ないことを瞬時に悟ったのである。

嶋子が箱を開けた理由もまた明確である。ごく普通の人である彼は箱に込められた霊力を認識できず、亀姫を偲ぶよすがを得ようとして箱を開けたのである。それは愚かな行為ではあったが、彼の神女への愛着の強さの帰結であった。この物語の語り手が「玉匣の開封」によって語ろうとしたことは、男女二人の愛の強さとその再確認であったということになる。

このテーマをさらに強調するために、逸文は二人の愛についての後日談を伝えている。蘭の花が風雲とともに飛び去った後、箱から生じた雲は亀姫のいる常世に届いて嶋子の言葉を伝えた。すると神女の声が帰ってきた。物語はこの交流を次のような歌として記している。

常世べに　雲たちわたる　水の江の浦嶋が子の　言持ちわたる

つまり、二人は別離の後も相聞歌を伝えあい、惜別の思いと愛の再確認を行ったのであり、玉匣はそのための交信手段となったのである。ひとたび遠方に赴けば手紙の遣り取りですら容易でなかった時代に、こうした交信手段の存在がどれほど人々の心を魅了したか、それはわれわれの想像をはるかに越えるものだったに違いない。

もっとも、この相聞の部分は、水野裕の詳細な分析により、遙か後の時代の追加であることが明らかにされている。

浦島伝説の原初においては、玉匣は神女の化身である美しい花の入れ物であり、開封の後は霊界とこの世との交信の道具となったのである。こうした道具だての中で示されるのは、嶋子の人間ゆえの過ちとその帰結である離別をへて、なお変わることのなかった二人の愛情の強さである。

②万葉集

万葉集巻九にみえる高橋虫麻呂によって記された浦島物語は、話の大筋は丹波国風土記の伝説を受け継ぐものだが、細部に多少の異同がみら

れる。

ここでは、神女は風土記逸文とは異なり玉匣を開けてはならない理由をはっきり述べている。「常世にまた帰ってきて私に会うつもりなら開けるな」と言うのである。しかし帰郷した島子は、すでに自分の家も村もなく親に会うこともできないことを知る。驚愕しつつ、彼は神女から与えられた箱を開ければ、元の世界が回復されると考えた。彼は神女との再会よりも、この世での失われた生活の回復を望んだのである。しかし、箱を開けるとこの期待は裏切られ、白雲を浴びて嶋子は老人となり、じきに死んでしまった。

ここには、いち早く近世説話の結末である白雲（煙）と老人化というモチーフの原型が現れている（ただし白煙ではなく逸文と同じく白雲にとどまっている）。小さなことのようだが、白雲は、はるか後の昔話のように老化を引き起こす妙薬という役割が与えられている訳ではない。それは箱の中が空であったことを示すための修辞にとどまっている。そして、「老化」についても、特別な意味を与えられているのではなく、死にいたる時間の短さを強調するためだけの記述だという印象を受ける。作者は箱の開封が嶋子の直接の死因ではなく、それによってすべてを喪い神女との再会すら不可能となったことによる若者の絶望とその帰結である老衰こそが死因であると考えたのである。

常世辺に　住むべきものを　剣大刀　己が心から　おそやこの君

（新編日本古典文学全集七、一九九五年）

高橋虫麻呂は、箱の開封以前に、嶋子が常世を捨ててこの世に帰ってきたこと自体を非難している風である。この点では、丹後国風土記の判断をさらに進めたものと言える。しかし、虫麻呂の関心は風土記逸文が強調した二人の「愛の強さ」ではなく、人の子である嶋子の判断の誤りに向けられている。白煙と老化は、取り返しのつかない失敗とそれを悔いて絶望した人間の悲劇を強調するすぐれた文飾であるが、それ以上の意味が与えられていた訳ではなかったと言える。「白雲（煙）と老化」に新しい意味が与えられるにはまだ長い時間を必要としたのである。

③御伽草子

虫麻呂の後も長く「白雲と老化」は浦嶋説話の語り手たちの関心を引くことはなかったと思われる。たとえば、中世に完成し、江戸時代に引き継がれた『御伽草子』の作者は、白煙の役割にも島子の老化にも大した関心を払っていないからだ。

『御伽草子』の浦島物語では、若者が子どもたちに捕らえた亀を哀れみ海に返してやるというささやかな善行をきっかけとして報恩の物語が始まる。しかし、ここでは、善行と報恩の二者は他の報恩譚のような単純な対応関係に置かれてはいない。そして、玉手箱はゆがんだ連鎖の要の位置に置かれている。それは、浦島にとっては（もちろん聞き手にとっても）、亀の助命という仏教的善行に対する報恩として贈られたはずの物である。ところが、この当然とも言うべき期待は徹底的に裏切られる。故郷に戻った浦島は、地上ではすでに七〇〇年の歳月が過ぎており自分がとんでもない悲運に見舞わてしまったことを悟る。ところが、悲運に直面しつつ、浦島はなお玉手箱が報恩の贈り物であることを信じていた。それが善行の対価であることは仏教的報恩思想においては当然のことであり、乙姫から玉手箱を受け取った時からの、彼にとっては疑いようのない確信だったからだ。だから、「開けるな」という言葉にもかかわら

ず、浦島は手箱を開封したのである。彼のこうした行為の動機は、中にあるべき宝物を得たいという気持ちだけではなかったはずである。「報恩の成就」が実現し報恩譚が完結することを当然と考える文化の中で、彼の行為は「予定調和の破綻は放置されてはならない」という意識にもとづく規範的な行為でもあったのである。しかし、箱の中に宝物はなく、報恩はついに成就しなかった。そして浦島はたちまち老人となってしまう。

しかし、『御伽草子』の筆者は、太郎の老化を悲劇とはとらえていなかったと思われる。手箱の開封の後、浦島太郎が鶴になったと語り「老化」が長寿の結果であることを、つまりめでたいことだと強調しているからである。御伽草子の作者は、浦島が長寿を得てやがて鶴となり神と祀られたことを彼の善行への報恩の成就だと説明した。ならば、その結末にいたる「白煙老化」も悲劇として強調されるはずはないのである。

しかし、報恩の恩恵に浴した人間は、神となる必要はない。善行にも関わらず報恩に浴することなく死んだ悲運の人だからこそ浦島は神として祀られたのではなかろうか。とすれば、御伽草子の語り手がいかに報恩の成就を強調しようとも、これは報恩に値すべき人が悲運に見舞われたアンチ報恩譚である。

では、アンチ報恩譚としての浦島物語の中で、玉手箱はどのような意義をもっていたのであろうか。手箱の中には白煙しかなかったことにたいし、草子の読者の大部分は落胆したに違いない。それに対し、草子の作者は玉手箱の中に入っていたものは、浦島の七〇〇年分の「年＝歳」であったと説明し、それは、乙姫の「はからい」だったという。そのために浦島は七〇〇年の後にも生きながらえることができた。つまり、長い長寿そのものが乙姫による恩恵だと主張しているのである。しかし、太郎は乙姫の愛と配慮とを疑い、約束を破って玉手箱を開けてしまった。ここから、太郎の後悔と彼の側からの新しい報恩の物語が始まる。つまり、玉手箱とは、二つの報恩譚の結節点を示す道具立てだったのである。

しかし、報恩のサイクルは永遠に連鎖しうるのだろうか。こうした読み手の疑問にたいし、草子の語り手は、浦島の後半の善行に対して神に祀られるという報恩があったと記して物語を終えている。

これを報恩譚としてみるなら、最後の報恩は鶴となった太郎の蓬莱山への帰還と乙姫との再会として示されていると考えられる。「乙姫の愛情を疑い開封のタブーを犯した太郎が、それにも関わらず乙姫との再会と夫婦としての永遠の生活を回復できたこと」に報恩の完成がある。つまり、これは夫婦の偕老同穴の物語だったのであり、この点が、それ以前の逸文、万葉集とも、後の時代の昔話とも異なる点である。

④巌谷小波の浦島太郎

御伽草子のもう一つの意義は、浦の嶋子と亀姫との恋物語を、太郎という長男の男と乙姫という長子ではない娘の恋物語としてとらえなおした点にある。しかし、彼らの婚姻がなぜ破局を迎えなければならなかったか、この問題に対して、御伽草子ではなお明確な答を与えてはいない。それを明示したのは、巌谷小波の作品とそれを踏襲した新しい昔話である。

巌谷小波の浦島物語はその基本的な骨組みを風土記逸文や御伽草子と共有している。にも関わらず、彼の浦島はどこか庶民的な雰囲気がただよう。風流人で美男子だった嶋子に比べれば浦島太郎はハンサムで優しくはあっても平凡そのものの男であり、乙姫もまた蓬莱山の神女に比べれば庶民的な女性である。

より庶民的になった浦島は美男子というより「長男」としての特質を強調されるようになる。亀姫もまた「オトヒメ＝弟姫」という名を与えられることによって、兄か姉をもつ身近な女性となった。つまり、古代の筒川村の怪異譚は、どこにでもいる男女の恋物語へと成長し、まったく別の昔話へと飛躍したのである。

常世の国で理想の女性に出会いながら嶋子はなぜ帰郷を決心したのか。「逸文」では、かの地での生活が三年の長きにわたり、父母が恋しくなったからとのみ記している。ホームシックは人の自然な心情かもしれないが、理想郷の夢のような生活への耽溺からの脱出の理由としては、説得力のあるものとは言いがたい。この動機は、蓬莱山がすべてを忘却させるほどの魅力をもっていなかったことを露わにしてしまうからだ。この点では、万葉集もまったく同じである。常世でのすばらしい生活を捨てたことをいくら非難しても、理想の生活に飽きてしまった者には通じない。

これに対し厳谷小波の物語では帰郷の理由ははっきりしている。浦島は「三年も家に帰らず父母のことが心配だから、帰って安心させたい」と言って三〇日の「暇」を乞う。長男である浦島太郎には、年老いた両親に対する扶養の義務があったからである。

しかし、地上では七〇〇年が過ぎており、両親との再会は不可能であった。絶望した浦島は玉手箱を開封し老人となって死んだ。亀を助け、父母のために至上の幸せを捨てた男が、報われることなく死んだ。小波の「浦島」は、婚姻破局譚であるばかりでなく、孝行息子の悲劇譚でもある。

乙姫は先に指摘したように、オトウトヒメであり、キョウダイがいたと思われる。もっとも、これには諸説がある。一は兄がいたというもの、二は兄ではなく長女（中世には大姫と呼ばれた）がいたとするものである。いずれの場合でも、乙姫さまですら年頃なのであるから、すでに既婚であっただろう。つまり、前者なら兄は竜宮の主竜王の嫡子であり、後者においても姉姫はやがて竜王となるべき跡取り婿をすでに得ていたことになる。つまり、乙姫の婿となった浦島は、竜宮城では多くの召使いに囲まれ安楽な生活を与えられていたが、いずれは分家として竜宮家の外に出るべき存在であった。

海の支配者竜宮王家の親族分家ならば高い地位は与えられようが、しかし、婿養子となった浦島には両親を引き取ることはできない。浦島がもし孝行息子だったならば、竜宮王家からの分家はあり得ない選択だったと思われる。

ならば、乙姫を伴って帰郷し、浦島家の家長となって両親の世話をすることは可能であるか。富裕な家の次女である乙姫に、貧しい漁家の生活が耐えられるとは思えない。浦島が強く望んだとしても、浦島家の嫁となることは、乙姫にはあり得ないことであった。三〇日の帰郷が何を意味するか、二人の間にどれほどの共通理解があったかは分からないが、それが永遠の離別となることを乙姫だけは知っていたと思われる。

永い離別が不可避であることを知った時、乙姫は何を考え、何をしたか。

五　玉手箱とは何か

玉は美称であるから、玉手箱とは特別に美しい手箱のことである。手箱とは櫛や化粧道具など女性の身の回りのものを入れておくものであったが、柳田国男によると、日本社会では手箱は長く女性の神秘的な力の源泉として恐れられていたと言う。家々の平凡な女性の霊力ですら人々が畏怖したのであれば、神女の手箱にはどれほどの霊力が宿っていると

思われたであろうか。それは単なる小物入れではなく女の霊力の源泉であるから、男はたとえ恋人や夫であっても中をのぞいてはならないものであった。その、女と一心同体で、しかも唯一無二の手箱を、乙姫は浦島に与えた。つまり、玉手箱は、乙姫の至上の愛の証だったのである。

地上では七百年の時がたち、父母もすでに生きてはいないことを知ったとき浦島はどうすべきであったか。玉手箱が乙姫の愛の証であるなら、彼はそれをもって竜宮に戻ることができたはずである。それはまた乙姫の願いでもあっただろう。しかし、玉手箱は開けられ、破局は決定的となった。

なぜ玉手箱はあけられたのか。風土記逸文では、それを浦の嶋子の神女を懐かしむ気持ちの強さに求めていた。もちろん逸文の結末の基底にも、女性の手箱の神聖さを犯してはならないという禁忌の存在があったと考えられる。しかし、この禁忌の侵犯は二人の強い愛の帰結であり、このロマンの破局の必然を説明してはいない。

御伽草子では、浦島は乙姫の仕打ちに怒り、報恩譚の完成を希求して手箱を開けてしまった。浦島の行為は愚かではあるが、報恩思想を信じる当時の人々にとっては、正しいものであり、それは破局の原因とは言い難い。それに対し、昔話の浦島は「悲しみ」のあまり約束を忘れたことになっている。それが破局へと行きついたのは何故だろうか。

なぜ、昔話の浦島は手箱をもって竜宮に帰らず、手箱を開けるという愚かな選択をしたのか。もし彼が孝行息子だったならば、その答えを見つけることは、さほど困難ではない。

会おうとして帰ってきた両親が死んでいたのであるから、浦島が竜宮の乙姫の元に帰ることを妨げる障害はないと考えるのは近代人の短見である。たとえ両親が死んでしまっても、長男である太郎には、先祖祭りの義務が依然として残っていた。両親の晩年の世話を果たせなかった浦島太郎には、その義務はとりわけ重いものに感じられたにちがいない。

しかも、先祖祭りは彼一代で終わらせるべきものではなかった。柳田国男が強調したように「家永続の願い」が庶民の究極の理想であったなら、先祖祭りは浦島太郎の死後も、子々孫々に受け継がれていかなければならない。

子々孫々にわたる先祖祭祀が至上命令ならば、彼は結婚し、子孫を残さなければならない。つまり、彼が孝行息子として両親への義務を果たそうとする限り故郷での結婚は不可避であり、竜宮への帰還はあり得ないことになる。

この時なにが問題となるか。浦島は、乙姫が一目惚れするほどのたぐい稀れな容姿の持ち主であった。しかし、村の中では家産のない男は、たとえハンサムであっても結婚をすることは容易ではない。浦島は村の娘との結婚の前提として幾ばくかの財産を必要としたのである。これが、浦島が手箱を開けるに至った必然的理由であったと思われる。

しかし、箱の中からは白煙が立ち上り、浦島太郎は老人に変じた。浦島の老化はもはや彼が結婚の資格のない男となったことを意味している。つまり、乙姫の「箱を開けるな」という禁止とそれを破った浦島の老化は婚姻の破局に至る必然のプロセスだったのである。

玉手箱は、乙姫の愛の証であり、浦島太郎の竜宮帰還の手がかりであっただけではなく、若者が乙姫との愛を裏切り地上の娘と結婚しようとした時の復讐の手段ともなったのである。

太郎と乙姫の破局の意義を巌谷小波がどれほど認識していたかは、今日では明かにすることは難しい。いずれにせよ、彼の浦島太郎は、明治期の国定教科書の教材となったという幸運もあって、広く昔話として受

け入れられていった。それは彼の浦島物語が婚姻破局譚として日本人に受け入れられるべき特質と魅力を具備していたからだ思われる。

参考文献

『風土記』日本古典文学大系二、岩波書店、一九五八年
『定本柳田国男集』一巻、筑摩書房、一九六二年
『定本柳田国男集』五巻、筑摩書房、一九六二年
『定本柳田国男集』六巻、筑摩書房、一九六二年
『定本柳田国男集』八巻、筑摩書房、一九六二年
『玉手箱と打出の小槌』浅見徹、中公新書、一九八三年
『御伽草子』（下）岩波書店、一九八六年
『浦島太郎の文学史』三浦佑之、五柳書店、一九八九年
『万葉集二』新編日本古典文学全集七、小学館、一九九五年
『風土記』新編日本古典文学全集五、小学館、一九九七年